

中枢神経症状を呈した A/H3 亜型、B 型インフルエンザウイルス重複感染の 2 例

¹公立昭和病院 小児科、²公立昭和病院 感染症科、
³国立感染症研究所 インフルエンザウイルス研究センター

○田中 智子¹、大場 邦弘¹、小田 智三²、高山 郁代³、
中内 美名³、影山 努³

【背景】2012 年 1 月～4 月に都内では、A/H3 亜型、B 型インフルエンザウイルスが同時期に混合流行した。この期間に中枢神経症状を主訴に当院を受診し、A/H3 亜型、B 型インフルエンザウイルスの重複感染が証明された 2 例を経験したので報告する。【症例 1】6 歳男児。発症日の朝から発熱を認め、近医受診。イムノクロマト法でインフルエンザウイルス陰性であった。第 2 病日の朝、異常言動と嘔吐を認め、当院受診。イムノクロマト法で A 型、B 型陽性、Direct RT-LAMP 法で A 型、H3 亜型、B 型陽性となった。また、real-time RT-PCR 法でも A 型、H3 亜型、B 型陽性となり、さらに検体を MDCK 細胞に接種してウイルス分離を試みた結果、A/H3 亜型および B 型 (Yamagata 系統) が分離された。受診時には意識清明であり、熱せん妄と診断した。タミフルで治療を開始し、第 4 病日に解熱した。【症例 2】4 歳男児。全身性強直性間代性痙攣が出現し、当院受診。受診時に発熱に気づいた。イムノクロマト法で A 型陽性 (B 型陰性)、Direct RT-LAMP 法で A 型、H3 亜型陽性 (B 型陰性) となった。また、real-time RT-PCR 法では、A 型および H3 亜型陽性、ウイルス量はごくわずかであったが B 型も陽性となった。しかしウイルス分離では A/H3 亜型のみしか分離できなかった。痙攣およびその後の意識障害が約 1 時間持続したため、痙攣重積と診断し、ラピアクタで入院加療とした。第 2 病日に意識清明となり、第 3 病日に解熱し退院となった。【結語】近年、インフルエンザの診断精度の向上に伴い、A 型、B 型インフルエンザウイルスによる重複感染例の報告が散見されるようになったが、中枢神経症状を伴った重複感染例の報告は見当たらない。本症例 2 例は、同時期に受診した A/H3 亜型もしくは B 型インフルエンザウイルス単独感染で中枢神経症状を呈した症例と比較しても、重症経過をたどる事はなかった。今後、遺伝子検査法の普及により、重複感染に関する症例の蓄積が進むものと考えられた。

EB ウイルスの CD8 陽性 T 細胞への持続感染に対し経時的な感染標的細胞の同定を行い消失を確認した EBV 関連血球貪食症候群後の一例

¹横浜市立大学附属病院 小児科、²国立成育医療研究センター 母児感染研究部

○金高 太一¹、菊地 雅子¹、野澤 智¹、今川 智之¹、
横田 俊平¹、今留 謙一²

血球貪食症候群は、適切な治療が行われなければ致死的な経過をとることもある。また EB ウイルス感染は血球貪食症候群や慢性活動性感染をきたすことがある。今回、感染標的細胞のモニタリングにより治療方針を選択し、免疫抑制剤のみで良好な経過をとった EB ウイルス関連血球貪食症候群の一例を経験したので報告する。症例は 7 歳男児。発熱 4 日目に前医を受診し、意識障害、肝脾腫をみとめ、汎血球減少、組織障害マーカーの上昇 (AST 843 U/L, LDH 3162 U/L)、フェリチン高値 (23000 ng/ml) のため血球貪食症候群を疑われ当院へ搬送された。骨髓検査で血球貪食像をみとめ、同日よりリポ化デキサメタゾンとシクロスポリンによる治療を開始した。症状、検査値の増悪傾向あり翌日から血漿交換を開始した。血漿交換は 3 日目より改善傾向を示し、計 5 日間行った。PCR 検査で EB ウイルスを検出し、成育医療研究センターに依頼した解析結果より感染標的細胞は B 細胞と CD8 陽性 T 細胞と判明した。感染細胞数の推移を確認しながら、症状・検査結果より治療の漸減を行い、18 病日にシクロスポリンを内服に、19 病日にリポ化デキサメタゾンをプレドニゾン内服に変更した。感染 EB ウイルス量の減少が緩除であり、メモリー B 細胞が少ないことから X 連鎖リンパ増殖症候群も疑われたが、遺伝子異常は指摘されなかった。CD8 陽性 T 細胞への感染が遷延したことから、慢性活動性 EB ウイルス感染への移行も危惧され、造血幹細胞移植の準備も進めた。しかし経時的な同定により検出感度以下までウイルス量が減少する事を確認できたため、移植は行わず免疫抑制剤の内服のみで治療を継続している。血球貪食症候群の病態に応じた急性期治療を行うことで良好な予後が得られたこと、その後は感染標的細胞を経時的に確認することが長期管理に有用と考えられたこと、を示す症例であり考察を交えて報告する。